

ヨブ記25-28章「人に関わる神」

1A 天にある神の主権 25

2A 地上にもある知恵 26-28

1B わずかな神の知識 26

1C 無益な助言 1-4

2C 陰府にもおられる主 5-14

2B 悪者の滅び 27

1C 全能者にかけての誓い 1-12

2C 友人以上に信じるヨブ 13-23

3B 人に探れない知恵 28

1C 鉱脈を見付ける人の努力 1-11

2C 宝石以上の価値ある知恵 12-19

3C 知恵の所在 20-28

本文

ヨブ記 25 章を開いてください。私たちは前回、第三弾における友人エリファズの主張と、それに反論するヨブの主張を読みました。ヨブは、正しい者が苦しむという不条理だけでなく、悪者が繁栄しているという不条理も話しました。ところがエリファズは、「全能者にとって、人が正しいかどうかなど関係のないことだ。全ての者は自分の悪の業によって滅びる。」として、ヨブが行った具体的な悪をあげつらいました。けれども、それらは根拠なき中傷です。しかしヨブは、彼らに反論することなく、神に対して論じたのです。

次は、ビルダデの主張です。けれどもご覧になったらわかるように、たった 6 節しかありません。ヨブは激しく反論しますが、ついに三人目の友人、ツォファルが語る場はなく、ヨブが最終的な答弁をこれでもかというばかりに行ないます。そして三人は黙ってしまうのです。私たちは今日、ビルダデの主張とそれに反論するヨブの主張を読みます。

1A 天にある神の主権 25

25:1 シュアハ人ビルダデが答えて言った。25:2 主権と恐れとは神のもの。神はその高き所で平和をつくる。25:3 その軍勢の数ほどのものがほかにあろうか。その光に照らされないものがだれかいようか。25:4 人はどうして神の前に正しくありえようか。女から生まれた者が、どうしてきよくありえようか。25:5 ああ、神の目には月さえも輝きがなく、星もきよくない。25:6 ましてうじである人間、虫けらの人の子はなおさらである。

ビルダデは、もはやエリファズのようにヨブが悪を行なったという中傷を行ないません。なぜなら、

ヨブが打ち立てた、悪がこの地上にはびこっているという主張に対して反論できなくなっているからです。彼は、神はいと高きところにおられる方であるから、私たちの営みに関わるような方ではない、私たちは虫けらのような存在なのだ、と言うに留めているのです。この点でヨブが怒りました、26章以降にそれが書かれています、あれだけ神学の特論を展開させ、ビルダデこそ彼をばっさばっさと切り刻んでいたのに、今や現実と直面して、言い逃れしているからです。それは 26 章以降で読みたいと思います。

その前に、ビルダデが語っている「虫けらのような人の子」ということに注目したいと思います。確かにビルダデが言っていることは正しいです。私たちは、今日、人権や尊厳についてその価値観が大切にされています。しかし、それはあくまでも神が人をご自分のかたちに造られたところにある尊厳であり、神を無視して人権や尊厳を主張することによって、今の社会の不幸と混乱が起こっています。自己の肥大化が起こっています。自己の神格化が起こっており、自分を否定するようなことを少しでも言う者に対しては猛烈に攻撃します。実に、自分を愛するということは終わりの日の特徴であります。「終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者・・(2テモテ 3:1-2)」しかし、人間は実に神の前には、ビルダデの言う通り虫けらに等しい弱き存在です。

しかし、ビルダデの過ちは、その虫けらをもってして「わたしの子」と呼んでくださり、ご慈愛を注いでくださる方だということです。「恐れるな。虫けらのヤコブ、イスラエルの人々。わたしはあなたを助ける。・・主の御告げ。・・あなたを贖う者はイスラエルの聖なる者。(イザヤ 41:14)」したがって、ヨブの訴えに対して彼は、神がその不条理にも何らかの形で関わっておられるのだという神学に立たなければいけなかったのです。イエス様は、空の鳥を弟子たちに見せてこう言われました。「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。(マタイ 6:26)」今日の社会では、私たちは駒として取り扱われます。しかし、神は空の鳥よりもはるかに優れた者として、実に神の子どもとしてみなしておられるのです。

もう一つ、ビルダデが言った言葉で大切なのは、「女から生まれた者」であります。これは他の友人もヨブ自身も使った言葉です。これは、一つに限界のある人として生まれてきたのだよ、という意味合いを持っています。そして、初めの人アダム以外はみなエバから生まれたのであり、罪の性質を持ち合わせているのだという意味合いを持っています。そして同じように、イエス様がバプテスマのヨハネのことを、「女から生まれた者のうち、彼よりも偉大な者は現れなかった。(マタイ 11:11 参照)」と言われました。

そこでパウロは、イエスが女からお生まれになったことを強調して、その贖いがなされたことを話しています。「しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。これは律法の下にある者を贖い出すため、その

結果、私たちが子としての身分を受けようになるためです。(ガラテヤ 4:4-5) イエス様は、人として限界のある者、罪のある者のところにまで来てくださったので、私たちは慰めと希望があるのです。

興味深く、難しい聖句はパウロが、テモテ第一 2 章の最後で言った言葉です。「しかし、女が慎みをもって、信仰と愛と聖さとを保つなら、子を産むことによって救われます。(15 節)」子を産まなければ救われないのか？不妊の女は救いにあずかれないのか？あるいは子のいない女は呪われているのか？などと思ってしまうのですが、おそらくこれはエバへの神の約束を語っているものと思われま。エバに約束された、女の子孫が蛇の子孫のかしらを砕くというものです。つまり、エバから罪ある人間が出てきましたが、エバの子孫であるキリストから同じように罪の取り除き、贖いが始まったということです。女は、このキリストによって救われます。

2A 地上にもある知恵 26-28

26 章から 31 章までが、ヨブによる長い主張になります。今日読む、28 章までがビルダデをはじめ三人の友人に対する主張で、29-31 章が神に聞いていただくことを視野にいれた主張です。31 章の終わりには、「ヨブのことばは終わった」とあるとおり、これでヨブは語りつくしました。ですから、これから彼の渾身の力を込めた言葉が始まります。

1B わずかな神の知識 26

1C 無益な助言 1-4

26:1 ヨブは答えて言った。26:2 あなたは無力な者をどのようにして助けたのか。力のない腕をどのようにして救ったのか。26:3 知恵のない者をどのようにしていさめ、豊かなすぐれた知性を示したのか。26:4 あなたはだれに対してことばを告げているのか。だれの息があなたから出たのか。

ヨブは、友人たちの言葉がいかに無益であったかを痛烈に批判しています。ヨブは、ここに書かれていることを苦しみにも遭う前に行っていました。友人たちがこれらのことを起こったことがあったのか？と批判しているのです。そのような助言をもしかしらしていたかもしれない、しかし、ヨブに対する無配慮と無感覚を見れば、まるでこれまで何もやっていなかったように見えるではないか、ということです。これはまさに、使徒パウロが言った愛がなければ無に等しい、という言葉であります。「また、たとえ私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。(1コリント 13:2)」

要は、友人たちの行っていた話しは、「上手な話だけれども役立っていない。」ということです。言葉そのものは、表面的には良いものです。しかし中身がありませんでした。ヨブは二つの点を指摘しています、4 節に「だれに対してことばを告げているのか」であります。ヨブに対しての言葉でなければいけないのに、これまでさんざん彼を語り、打ちのめしてきたのですが、もしそれが彼に

対する言葉ならば傷ついても仕方がないです。しかし、そうではなくヨブについては考えていなかった、ただ自分の神学の整合性や一貫性を保つために話していたということでもあります。

例えば私たちは、一つの優しい言葉、親切な言葉でさえも、一つの神学となり愛のない行為となりえます。とても苦しんでいる人に、「大丈夫だよ」と声をかけます。信仰的に間違っただけを言っている人に、「まあ、大丈夫だよ」と言います。そして、「それは違う」と正そうとする人にも、「ちょっと、それは言い方が良くないね。大丈夫だよ。」と言います。大丈夫ではないのに大丈夫と言う、それは裏返すと、その人と関わりたくない、自分が大丈夫のままにいたいということです。つまり、『『大丈夫』神学』なのです。苦しんでいる人について、その苦しみを共感するよう努力すること、そして神がそこに何を語られているのか共に祈り求めること、自分がそこに関わるリスクも負って執り成していくこと、このような骨の折れる過程が必要なのです。

もう一つは、「だれの息があなたから出たのか。」であります。ヘブル語の息と霊は同じ言葉が使われています。ですから、どの霊があなたから出たのか、とも訳せるのです。友人たちが、例えばツォファルは、こう言いました。「私の悟りの霊が私に答えさせる。(20:3)」あなたは、神の御霊から出した言葉だったのか？という問いかけです。一つの言葉を発する時に、それが神の霊からなのか、それとも自分の身勝手な肉から出てきたものだったのか、試される訳です。ペテロは、これで痛い思いをしました。イエス様が十字架に行くと言われた時に、そんなことはあってはならないと諫めましたが、イエス様は「引き下がれ、サタン」と言われたのです。神のことではなく、人のことを思っている、と言われました。正しいように見えるペテロの言葉は、実はサタンの霊が仕向けたものでありました。

同じことを話していても、全く同じ言葉を使っても、それが空疎な言葉になりえるし、また人を立ち上がらせる愛の言葉にもなりえます。そして聞いている人は、どの霊から出て来ている言葉を、その臭いあるいは香りをかぐことができます。私たちは唯一、愛の御霊によって促された言葉によってのみ、人を立たせることができるのです。

2C 陰府にもおられる主 5-14

26:5 死者の霊は、水とそこに住むものとの下にあって震える。26:6 よみも神の前では裸であり、滅びの淵もおおわれぬ。

これからヨブは、行き詰まったビルダデの神学を滅多打ちにします。彼は、「神はその高き所で平和をつくる。」と言いました。この地上における正義について、何ら関わっていないかのように話しました。そこでヨブは答えました。地上どころか、神は地の深いところ、陰府に至るまで神の前にあるのだ、ということです。神の御霊はいっさいのところにおられる方です。天地創造の始まりにおいても、「やみが大きいなる水の上にあり、神の霊は水の上を歩いていた。(1:2)」とあり、御霊が確かに闇の水の上のところにおられたということが分かります。

26:7 神は北を虚空に張り、地を何も無い上に掛けられる。

「北」というのは、地の遥か向こう側を示しています。そこで地球が保たれていると当時の人々は考えていました。確かに、はるか北には北極があり、それを軸として地球は自転していますね。それで、イザヤ 14 章 13 節で、悪魔が「私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。」と言ったのです。しかし、その地の遥かとおくのところ、すべてを治めているはず中心点であってもそれは「虚空」の上に張られており、地も何も無い上に掛けられています。

ビルダデにとっては、天は神のおられるところ、地は神が干渉するまでもない、虫けらのような人間のいるところと位置づけましたが、ヨブは地どころか陰府に至るまで神はおられます。反対に地球の中心でさえ虚空において、神が造っておられるという神の偉大さを語っているのです。ところで、ヨブはこのことを紀元前二千年頃に話しました。しかし、この事実が科学的に発見されるのは、約三千六百年後、ケプラー等のキリスト者らによってであります。

26:8 神は水を濃い雲の中に包まれるが、その下の雲は裂けない。

雲には何億トンという大量の水が含まれていますが、なぜか空中のまま置かれています。

26:9 神は御座の面をおおい、その上に雲を広げ、26:10 水の面に円を描いて、光とやみとの境とされた。

円を描いているとありますが、地上が平らではなく円を描いているという指摘も、はるか後世に科学的に発見されたことであり驚くべきことです。

26:11 神がしかると、天の柱は震い、恐れる。

これは、地球上で非常に高い山々のことを指しているのでしょうか、天に向かう柱のようなものだと比喩的に表現していますが、その山々でさえ震えます。地震のことを話しているのでしょうか。

26:12 神は御力によって海をかき立て、神の英知をもってラハブを打ち砕く。26:13 その息によって天は晴れ渡り、御手は逃げる蛇を刺し通す。

海もまた、強大な力を持っている秘めた所であります。それは荒れ狂う悪の力を象徴しています(イザヤ 57:20 等)。ダニエル書 7 章には、おぞましい巨大帝国の興亡を四匹の獐猛な獣に例えています。それらは天の四方からの風で大波が掻き立てられているところから出ています(2 節)。ですから、イエス様が荒れ狂うガリラヤ湖を鎮められたというのは、悪の勢力を抑えつけたと

いう意味合いを、それを見た弟子たちは感じ取ったことでしょう。

そしてラハブというのは、元々は「高ぶる者」という意味です。後にエジプトを示す別称となります。ここではラハブが蛇であるとされています。この海に住む巨獣は、イザヤ書 27 章 1 節においてレビヤタンとも呼ばれており、蛇であり、海にいる竜とも言われています。そしてヨブ記の最後に、神がヨブに見せたのはこの巨獣でありました。黙示録 12 章において、この蛇また竜が悪魔であることを神は明らかにしており、竜また蛇において悪魔が動いていたことを示しています。いずれにしても、ヨブは陰府についても、膨大なエネルギーを持つ地球についても、そして海というおぞましい悪を示す力についても、神は圧倒的な力を持ってこれらを制しておられる、ということです。

26:14 見よ。これらはただ神の道の外側にすぎない。私たちはただ、神についてのささやきしか聞いていない。だが、その力ある雷を聞き分けようか。

これはすごいことです。これらの驚くべき神の御業にしても、神の囁きにしか過ぎないと言っています。ですから、囁きでなく雷であったならばどうやって聞き分けることができようか？ということですね。ヨブは、これだけのことを知っていながら、なおのこと神を自分はほんの少ししかしらないと分かっていた。しかし、他の友人はこれだけの知識も何もないのに、自分の知っていることが全てだと思って話していました。自分の神学の中に留まること、人を相手にせず、人に寄り添うことなく語る言葉は、知るべきものさえ分かっていない無知をもたらすのです。

ところで興味深いことに、黙示録 10 章に七つの雷が出てきます。大きな力ある御使いが、天から下りて来て、ししのように吼えました。すると七つの雷が声を出したのですが、ヨハネはそれを書きとめようとしたところ、「これは封じて書き記すな。」という声が天からありました(10:4)。注解書の中には、これが何であるかを推測しようとするものがあるのですが、愚かな行為です。ここでヨブが、「聞き分けようか」と言っている通り、聞き分けることのできないものだからこそ封じなさいと命じられたのです。

2B 悪者の滅び 27

このようにして、ヨブはビルダデの語っていることを粉砕しました。ビルダデが語っていることは、正しいのですがまるでヨブのことを考えていない無配慮な言葉であったので、ヨブは、ビルダデよりもはるかに全能者であられる神の属性を知っていたのです。ここでヨブは、ツォファルの主張を待っていたのかもしれませんが、けれども、彼は答えることがなかったのかもしれませんが。そこで彼がさらに言葉を語り始めました。

1C 全能者にかけた誓い 1-12

27:1 ヨブはまた、自分の格言を取り上げて言った。27:2 私の権利を取り去った神、私のたましいを苦しめた全能者をさして誓う。

ヨブは、二つのことを大胆に語っています。一つは、26章において語った全能者なる神を自分が信じているのだということです。これほどまでに偉大な神がおられ、この方を私は信じているという信仰を表明しています。もう一つは、その神が自分の権利を奪い、魂を苦しめているということです。これは初めに、サタンが神に対して告発したことです。「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。あなたは彼と、その家とそのすべての持ち物との回りに、垣を巡らしたではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地にふえ広がっています。しかし、あなたの手を伸べ、彼のすべての持ち物を打ってください。彼はきっと、あなたに向かってのろうに違いありません。(1:9-11)」私たちは、ヨブと同じようにいつも、自分の関係が持っている物によっているのかどうか試されます。信じたから失うものが多いということであっても、なおのこと神を信じていられるのか、というところで試されます。

彼は神を信じるのをやめたのではないのです。むしろ、全能者である神を信じているからこそ、今、起こっていることは神にしかできないことだと分かっていたのです。彼は、これがサタンという霊的存在によって、そのサタンさえも神が掌握しているということまでは知識がありませんでした。そこが苦しみでした。分からなかったことによって、魂が苦しんだのです。

27:3 私の息が私のうちにある、神の霊が私の鼻にあるかぎり、27:4 私のくちびるは不正を言わず、私の舌は決して欺きを告げない。

彼は渾身の力を込めて、話しています。自分の息が、神の御霊が自分の鼻にあるものと形容しています。事実、神がアダムを造られた時に、鼻にご自分の息を吹き込まれて、彼は生きた魂とされました。つまり、この命が続く限り、私は不正を言わず、欺きを語らないと誓っているのです。自分の魂のすべてを込めて、この宣言をしています。彼は、先ほどビルダデ等に、「だれの息があなたから出たのか」と言いましたが、ヨブは神の御霊による息によって語ると言っています。神の御霊は、このように自分の命、単なる言葉や表面的なことではなく、自分の生きている命の中に働いてくださいます。

27:5 あなたがたを義と認めることは、私には絶対にできない。私は息絶えるまで、自分の潔白を離さない。27:6 私は自分の義を堅く保って、手放さない。私の良心は生涯私を責めはしない。27:7 私の敵は不正をする者のようになれ。私に立ち向かう者はよこしまな者のようになれ。

友人たちが言っていたのは、ヨブが悪を起こっていたから、不正を行っていたからこの苦しみを受けていたのだという罪定めでした。したがって、その言葉を義と認める、つまり正しいとすることは決してできないと言っています。そして、それに挑みかかることは、不正を行っているのであり、不正を行っている者、よこしまな者と同じようにみなされるではないか、と言っています。つまり、彼らがヨブを罪定めにしたように、同じ量りで彼らが裁かれるということです。

27:8 神を敬わない者の望みはどうなるであろうか。神が彼を断ち切り、そのいのちを取り去るときは。27:9 苦しみが彼にふりかかるとき、神は彼の叫びを聞かれるであろうか。27:10 彼は全能者を彼の喜びとするだろうか。どんな時にも神を呼ぶだろうか。27:11 私は神の御手についてあなたがたに教えよう。全能者のもとにあるものを私は隠すまい。27:12 ああ、あなたがたはみな、それを見たのに、なぜ、あなたがたは全くむなしいことを言うのか。

これまで友人が語っていた、神を敬わない者たちに対する神の御手であります。ヨブは、神の前で、潔癖さを保ってきたと誓いました。けれども、私を責めてきたお前たちこそ、神を敬わない者の中に入るのではないかと、言っています。英訳ではこれが「偽善者」と訳されています。つまり、自分に責められるべき罪があるのに、他人を責めているということです。イエス様が、姦淫の現場で女を捕えたユダヤ人たちに対して、「罪のない者が、石を投げなさい。」と言われた時と同じことでもあります。

2C 友人以上に信じるヨブ 13-23

27:13 悪者の神からの分け前、横暴な者が全能者から受け取る相続財産は次のとおりだ。27:14 たとい、彼の子どもたちがふえても、剣にかかる。その子孫はパンに飽き足ることはない。27:15 その生き残った者も死んで葬られ、そのやもめらは泣きもしない。27:16 彼が銀をちりのように積み上げ、衣装を土のようになくわえても、27:17 彼がたくわえたものは、正しい者がこれを着、銀は、罪のない者が分け取る。27:18 彼はしみが建てるような家を建てる。それは番人が作る仮小屋のようだ。27:19 富む者が寝ると、もうそれきりだ。彼が目を開くと、もうそれはない。27:20 恐怖が洪水のように彼を襲い、夜にはつむじ風が彼を運び去る。27:21 東風が彼を吹き上げると、彼は去り、彼をそのいる所から吹き払う。27:22 神は容赦なくそれを彼に投げつけ、彼は御手からなんとかしてのがれようとする。27:23 人々は彼に向かって手をたたき、彼をあざけて、そのいる所から追い出す。

この言葉は、友人たち、特にツォファルがヨブに語った言葉とほぼ同様の強い言葉であります。ヨブは、とうの昔に彼らが言っている悪者に対する裁きなど知っていました。彼はもちろん、悪者への裁きを信じていました。しかし、それが彼には当てはまらないことを知っていました。しかし友人たちは、この知識をもってヨブを責め立てました。今、ヨブは形勢を逆転させたのです。自分は、まるっきりこの悪に加担はしていない。しかし、あなたがたがその同じ厳しさをもって、自分自身を測ってみなさい。あなたは、これらの悪者の滅びを刈り取ることになるのではないかと？絶対に、そうではないと言えるほど、全能者の前で誓えるほど良心は清められているのか？ということです。

少なくとも、今、ヨブに対して語っている空しい言葉によって、その言葉によって裁かれるということでもあります。これは、イエス様が悪霊を追い出された時に、それをベルゼブルの力によって追い出しているのだという言葉に対して語られたのと同じです。「良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。わたしはあなたがたに、こう言いましょ

う。人はその口にするあらゆるむだなことばについて、さばきの日には言い開きをしなければなりません。あなたが正しいとされるのは、あなたのことばによるのであり、罪に定められるのも、あなたのことばによるのです。」(マタイ 12:35-37)」

3B 人に探れない知恵 28

1C 鉱脈を見つける人の努力 1-11

そして、ヨブは鉱石を見付けるために、驚くほどのエネルギーと知恵を用いる人間の姿をこれから話していきます。聖書に出てくる人々は、私たちの主イエスご自身を含めて、喩えを使って語るのが好きです。一つの真理を語るために、私たちの知っている人間の営みを用います。ヨブは、友人たちが「知恵」だと思っているそれぞれの知識が、どうしようもなく役立たずと伝えようと思っています。知識があるだけで、知恵がないのです。知恵は、午前礼拝で学んだように、知識を生活の中で適切に適用していくことであります。それを友人たちは、ヨブにおいてできていませんでした。ヨブは知識と真実な神の知恵との違いを示すために、この鉱脈を見つける者たちの話をします。

28:1 まことに、銀には鉱山があり、金には精練する所がある。28:2 鉄は土から取られ、銅は石を溶かして取る。28:3 人はやみを目当てとし、その隅々にまで行って、暗やみと暗黒の石を捜し出す。28:4 彼は、人里離れた所に、縦坑を掘り込み、行きかう人に忘れられ、人から離れてそこにぶら下がり、揺れ動く。28:5 地そのものは、そこから食物を出す、その下は火のように沸き返っている。28:6 その石はサファイヤの出るもと、そのちりには金がある。28:7 その通り道は猛禽も知らず、はやぶさの目もこれをねらったことがない。28:8 誇り高い獣もこれを踏まず、たける獅子もここを通ったことがない。

地に深く、深く鉱石を探すために掘っていく姿です。猛禽や獅子がそこを通らないと言っているのは、地上では力あり、人間に害を与える制御できない存在でさえ入れないほどの所まで人間は掘っていつているということです。

28:9 彼は堅い岩に手を加え、山々をその基からくつがえす。28:10 彼は岩に坑道を切り開き、その目はすべての宝を見る。28:11 彼は川をせきとめ、したたることもないようにし、隠されている物を明るみに持ち出す。

この「川」はもちろん、地下水のことです。それをきちんとせき止めて、縦坑を掘ってきました。

ここからヨブが伝えたいことは、おそらく二つあります。それは、地の深い所であり、聖書的には、地の奥深く、陰府に近づいた所でもあります。その未知の世界に人間はたゆみなき情熱と努力を注ぎ進んでいくことができる能力があることを示しています。もう一つは、金銀など鉱石の価値です。ここまでのことをして、人間は金銀や銅を貴い存在として扱っています。

2C 宝石以上の価値ある知恵 12-19

28:12 しかし、知恵はどこから見つけ出されるのか。悟りのある所はどこか。28:13 人はその評価ができない。それは生ける者の地では見つけられない。28:14 深い淵は言う。「私の中にはそれはない。」海は言う。「私のところにはない。」

ここまでの努力をしても、「知恵」は見つからないということです。深いところまで掘り下げても見つからないし、さらにそれよりも深い、滅びの淵、死後の世界である陰府にも見つからないし、同じく恐ろしい、制御の利かないものとされていた海にも、それが見つかりませんでした。つまり、物質的な豊かさを得る知恵や技術を持つことはできても、人間がその知識を適切に用いて、どのように生きるべきかという知恵を持つことができていない、ということです。

28:15 それは純金をもってしても得られない。銀を量ってもその代価とすることができない。28:16 オフィルの金でもその値踏みをすることができず、高価なしまめのうや、サファイヤでもできない。28:17 金もガラスもこれと並ぶことができず、純金の器とも、これは取り替えられない。28:18 さんごも水晶も言うに足りない。知恵を獲得するのは真珠にまさる。28:19 クシュのトパーズもこれと並ぶことができず、純金でもその値踏みをすることはできない。

当時知られていた、あらゆる高価な宝石をここで列挙して、それよりも知恵のほうが尊いということをお話しています。私たちは、この世においてここまでの技術を発展させるのか？と驚くことがあります。日本はこのような技術に極めて強いです。そして、私たちには生きていくためのあらゆる知識を持っています。生きていくための世渡り、身につける技能、その他いろいろな知識を身につけています。そして実に、私たちは神の知識でさえも人間的な知識として追求します。ヨブの友人たちのように、神の知識の整合性、一貫性、自分の頭の中で考えたものに当てはめていく力はあるのですが、それを、知恵をもって生きていく、生活の中で適切に用いていくことに欠けているのです。午前礼拝でお話したように、夜通し釣りはしていたけれども、一匹も魚がとれなかったペテロと同じようになってしまうのです。

しかし、イエス・キリストという方に知恵があります。イエスが語られたことにペテロが従った時に、実際に意味あることができました。コロサイ書にこうあります。「このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。(2:3)」イエス様に触れる時に、私たちは知恵を得ます。そこには人々を動かす力があります。使徒の働きで、足なえの男がペテロとヨハネを見つめました。彼らはいいました。「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。(使徒 3:6)」すると、彼はたちまち歩くことができました。イエスこそが知恵であり、この方によって私たちは実際に動くことができるのです。そして、キリストが流された血そのものが、私たちに知恵を与える力があります。「ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはならず、傷もなく汚れるもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。(1ペテロ 1:18-19)」

3C 知恵の所在 20-28

28:20 では、知恵はどこから来るのか。悟りのある所はどこか。28:21 それはすべての生き物の目に隠され、空の鳥にもわからない。28:22 滅びの淵も、死も言う。「私たちはそのうわさをこの耳で聞いたことがある。」28:23 しかし、神はその道をわきまえておられ、神はその所を知っておられる。28:24 神は地の隅々まで見渡し、天の下をことごとく見られるからだ。28:25 神は風を重くし、水のはかりで量られる。28:26 神は、雨のためにその降り方を決め、いなびかりのために道を決められた。

自然界のどこに行っても、知恵は見つけることはできません。しかし大事なのは、先ほどヨブが論じた神の創造における知恵を見ましたが、神が隅々まであらゆることを知っておられます。神のみがその道と場所を知っておられます。

28:27 そのとき、神は知恵を見て、これを見積もり、これを定めて、調べ上げられた。28:28 こうして、神は人に仰せられた。「見よ。主を恐れること、これが知恵である。悪から離れることは悟りである。」

主を恐れること、そして悪から離れることが知恵であります。このことは約千年後に、あらゆる知識を持っていたソロモンが晩年に結論付けたことでもありました。「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。(伝道者 12:13)」

ヨブも友人たち以上に、神の知識を持っていました。しかし、ヨブは知っていたのです。これらの知識をただ振り回しているのでは、全く役に立たないことを。今、受けている不条理に対して何ら役になっていないことを。むしろ、それは苦しんでいる人に対して害を与えていることを。私たちが、聖書の知識を得るにしても、この世の人たちと同じようにそれをまとめ、整理し、理解したところで、鉱石を掘っていき宝石を見つけるのですが、知恵は見つからないような状態に陥ってしまいます。

主を恐れるとは、神の命令を守ることです。そしてイエス・キリストを知ることです。「知る」というのも、イエス様との出会いを、生活のど真ん中でお迎えすることです。そして、その命令に従うことです。ペテロが大漁を体験できたように、これまで求めていたこと、いろいろなところについて捜し求めていたもの、けれども徒労に終わったものを、目の前で一気に獲得できるのです。

私たちは信仰を持つときに、その第一歩を踏んでいました。「しかし、信仰による義はこう言います。「あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と言ってはいけない。」それはキリストを引き降ろすことです。また、「だれが地の奥底に下るだろうか、と言ってはいけない。」それはキリストを死者の中から引き上げることです。では、どう言っていますか。「みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある。」これは私たちの宣べ伝えている信仰の**ことば**のことです。

なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。(ローマ10:6-9)自分が地の奥底に下るぐらいの情熱を注いでも見付けられないもの、天に上るぐらいの情熱を注いでも見付けられないもの、これら自分の心と口に、キリストについての言葉を受け入れることによって実現するわけです。

知恵を持っている人のみが、実を結ばせることができます。聖霊に導かれ、愛の実を結ばせることができます。自分がどこに木が植えられているか確かめる必要があります。主の恐れ、キリストの言葉に受けられているか、それとも友人のように、生活の現実から目を逸らし自分だけの世界から出ていこうとせず、実が結ばれていないかのどちらかなのです。

What is “the fear of the Lord”? It is loving reverence for God, who He is, what He says, and what He does (Mal. 2:5–6). It is not a fear that paralyzes, but one that energizes. When you fear the Lord, you obey His commandments (Ecc. 12:13), walk in His ways (Deut. 8:6), and serve Him (Josh. 24:14). You are loyal to Him and give Him wholehearted service (2 Chron. 19:9). Like Job, when you fear the Lord, you depart from evil (Prov. 3:7–8). The “fear of the Lord” is the fear that conquers fear (Ps. 112); for if you fear God, you need not fear anyone else (Matt. 10:26–31).

So, the first step toward true wisdom is a reverent and respectful attitude toward God, which also involves a humble attitude toward ourselves. *Personal pride is the greatest barrier to spiritual wisdom.* “When pride comes, then comes shame; but with the humble is wisdom” (Prov. 11:2, NKJV).

The next step is to ask God for wisdom (James 1:5) and make diligent use of the means He gives us for securing His wisdom, especially knowing and doing the Word of God (Matt. 7:21–29). It is not enough merely to study; we must also obey what God tells us to do (John 7:17). As we walk by faith, we discover the wisdom of God in the everyday things of life. Spiritual wisdom is not abstract; it is very personal and very practical.¹

¹ Wiersbe, W. W. (1996). *Be Patient*. “Be” Commentary Series (107–108). Wheaton, IL: Victor Books.